

新潟県寺泊町
屋鋪塚遺跡発掘調査報告書

2004

寺泊町教育委員会

新潟県寺泊町
屋鋪塚遺跡発掘調査報告書

2004

寺泊町教育委員会

序

日本海に面した寺泊町は、日本海を介した文化伝播の中継点として、古くから重要な位置を占めて参りました。県内では数少ない前期古墳の大久保古墳群、県内最古の寺院跡とされる横滝山廃寺など、町内に存在する遺跡には、しばしばその時代時代の先進的な要素を認めることができます。当時の寺泊の人々が、日本海を介してもたらされた新たな文化をいち早く取り入れたことがうかがえます。

今回発掘調査を行った屋鋪塚遺跡は、弥生時代後期に造られた方形台状墓とよばれる墳墓です。墓坑や周溝から多くの土器が出土し、その土器や墳墓の造り方の特徴から、はるか西の丹後地方との関わりが考えられています。この発見は、すでにこの時代に日本海を介した文化交流が盛んに行われていた証として、多くの関係者の注目を集めました。

この調査成果が、歴史を解明するための資料として広く活用されるとともに、町民の郷土と歴史に対する意識の向上の一助につながれば幸いです。

最後に、発掘調査や本書刊行に当たりまして、ご理解ご協力を賜りました大森土砂採取株式会社並びに地元住民の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成16年3月

寺泊町教育委員会

教育長 柳下明也

例　　言

- 1 本書は、新潟県三島郡寺泊町大字入軽井字屋舗2963-1に所在する屋鋪塚（やしきづか）遺跡の発掘調査記録である。
- 2 調査は、町軽井地内における大森土砂採取株式会社の土砂採取事業に伴い、寺泊町が大森土砂採取株式会社から受託し実施したものである。発掘調査は寺泊町教育委員会が調査主体となり、確認調査を平成14年6月18日～21日、8月6・7日に、本発掘調査を平成14年10月17日～12月18日、平成15年3月5日～31日行った。また、整理作業及び報告書作成に係る作業は平成15年度に行った。
- 3 調査に要した費用は、確認調査は埋蔵文化財保護部局（寺泊町教育委員会）が負担し、本発掘調査は事業者（大森土砂採取株式会社）が負担した。
- 4 発掘調査組織は以下のとおりである。

調査主体 寺泊町教育委員会（教育長 柳下 明也）

管理 大塚 文雄（事務局長）

庶務 星 博（社会教育係長）

調査担当 八重樫由美子（社会教育係主事）

調査作業員 阿部 広 今井儀一 北澤武夫 近藤政美 普沼利實 早川一郎 星 共家 峰島一郎
山田茂雄 小越秋夫 小林霞石 星カズエ（以上、寺泊町シルバー人材センター）

- 5 本遺跡の発掘調査に関する図面、出土遺物等のすべての資料は、寺泊町教育委員会が保管している。遺物の注記は屋鋪塚の略記号「YK」とし、遺構名・地点・層位を併記した。
- 6 本書に掲載した写真は、八重樫が撮影した。ただし、写真図版11（上段）及び写真図版12は有限会社寺泊測量設計が、写真図版11（中段及び下段左）は中島栄一氏が撮影したものを使用した。
- 7 本書の執筆及び編集は、八重樫（寺泊町教育委員会）が担当した。
- 8 本書の内容は、先に発表した現地説明会資料・記者発表資料その他の内容と、遺跡の時期の認識・遺構の名称等において若干の相違があるが、本報告書を以て現時点での認識とする。
- 9 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くの御教示と御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げたい。（敬称略　五十音順）

相田 泰臣 青木 勘時 赤澤 徳明 浅野 良治 甘粕 健 石川日出志 伊藤 啓雄
大野 英子 置田 雅昭 小熊 博史 尾崎 高宏 金子 拓男 駒形 敏郎 笠沢 正史
新宅 由紀 鈴木 俊成 関 雅之 高橋 浩二 滝沢 規郎 寺村 光晴 鳥居 美栄
中島 栄一 橋本 博文 肥後 弘幸 広井 遼 三ツ井朋子 山崎 正春 渡邊 明和
大森土砂採取株式会社 （財）新潟県埋蔵文化財事業団 新潟県教育庁文化行政課 和島村教育委員会

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
1 遺跡の発見と調査原因.....	1
2 踏査及び確認調査.....	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
1 地理的環境.....	2
2 歴史的環境.....	2
第Ⅲ章 調査の概要	4
1 現況と調査方法.....	4
2 調査の経過.....	5
第Ⅳ章 遺構・遺物	7
1 墳形・規模・外部施設.....	7
2 埋葬施設.....	8
3 墳丘の造成.....	8
4 出土遺物.....	9
第Ⅴ章 まとめ	12

挿図目次

第1図 周辺の遺跡（弥生～古墳時代）.....	3
第2図 各調査区名と遺構名.....	4

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧（弥生～古墳時代）.....	3
第2表 出土遺物観察表.....	11

図版目次

〔図面図版〕

- 図版1 調査前測量図 (1/250)
図版2 調査後測量図及び墳丘断面概要図 (1/250)
図版3 出土遺物分布図 (1/80)
図版4 墳丘土層断面図 (1/80)
図版5 墓坑実測図 (1/30)
図版6 周溝 (SD-01・SD-02) 実測図 (1/40)
図版7 墳丘土層断面図1 (1/40) a・b・c・d・e・f サブトレ
図版8 墳丘土層断面図2 (1/40) g・h サブトレ
図版9 出土遺物実測図1 (1/3・1/1) 墓坑・SD-01・SD-02
図版10 出土遺物実測図2 (1/3) SD-04・墳丘上面

〔写真図版〕

- 図版11 遺跡遠景
図版12 遺跡全景
図版13 調査前全景 SD-01
図版14 SD-02 墳丘南東部土層断面
図版15 SD-03 SD-04 墳丘南東部の急斜面 調査作業風景
図版16 墓坑
図版17 墓坑内棺跡
図版18 完掘後全景 盛り土除去後 サブトレンチ土層断面
図版19 出土遺物 (墓坑 SD-01 SD-02)
図版20 出土遺物 (SD-04 墳丘上面)

第Ⅰ章 調査に至る経緯

1 遺跡の発見と調査原因

屋舗塚遺跡は、新潟県三島郡寺泊町大字入軽井字屋舗2963-1に所在する塚で、寺泊町遺跡No.96として周知化されていた。発掘調査時まで遺跡の規模・時期等は不明で、『寺泊町史』資料編2では近世以降の円墳として理解されている。遺跡が所在する新潟県三島郡寺泊町大字岩方・田尻・矢田・入軽井・町軽井周辺は、以前より土砂採取事業が盛んに行われており、現在も複数の事業者が土取りを行っている。平成14年4月11日、大字町軽井地内で土砂採取事業を行う大森砂利採取株式会社（以下、事業者）から、土砂採取地の範囲拡大に関する「事業計画事前協議書」が寺泊町に提出され、この開発予定地内に屋舗塚遺跡が所在したため、寺泊町教育委員会（以下、町教委）は遺跡の取扱いについて事業者と協議を行った。協議の後、平成14年5月7日に現地踏査、同年6月18日から6月21日と8月6・7日に確認調査を実施した。確認調査の結果、開発に当たっては本発掘調査が必要であることが判明し、県教育庁文化行政課の指導のもと事業者との協議をさらに重ねた。その後、同年10月から約3か月で本発掘調査を行うことで事業者と合意するに至った。

2 踏査及び確認調査

踏 査 平成14年5月7日に現地踏査を実施した。現況は雑木が茂る山林で、踏査時期が初夏の繁茂期であったため、地形の観察は困難を極めた。現場では辛うじて緩やかな塚状の高まりを確認できたが、この地点は丘陵の頂点にもあたり、この塚状の高まりが自然地形なのか人工的に築かれたものなのか判断が難しい状況であった。遺物は採取できなかった。

確認調査 平成14年6月18日から21日にかけて確認調査を実施した。周辺の雑木を人力で刈り払い、墳丘の推定位置に幅1mのトレーナーを十字に設定した。調査面積は33m²である。表土除去から掘削までのすべての作業を人力で行い、基本層序と遺構・遺物の確認を行った。調査では地表下約10~20cmで墳丘面が検出され、墳頂部で弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる上器が出土した。また、墳丘の南西・東北・北西の裾部に、墳丘を囲むように溝が存在することがわかった。この結果、屋舗塚は当初の予想（近世）を遥かに遡る弥生時代後期から古墳時代前期に帰属する周溝墓の類である可能性が高まった。周溝の残存状態も良く、墳丘が後世の削平をほとんど受けていないことから、墳墓はきわめて良い残存状態にあることが予想された。

確認調査の結果を重く受け、その後の開発に当たっての遺跡の取り扱いについての協議も、これまで以上に慎重なものとなった。また、古墳時代前期という可能性から前方後円（方）形の墳墓になる可能性も考えられたため、墳丘形態のさらなる把握を目的に、新潟県教育委員会の指導のもと同年8月6・7日に追加の確認調査を実施した。調査では、先に確認された周溝の外側での墳丘の有無確認が中心となり、周溝外側の平坦面に墳丘に直交するように幅1mのトレーナーを2本設定した。調査面積は18m²である。調査にかかる作業はすべて人力で行い、層序と遺構・遺物の確認を行った。この調査では遺構・遺物は確認できず、屋舗塚の墳丘範囲は、先の確認調査で把握した周溝内に収まることがわかった。また、屋舗塚の墳形は円形ないし方形であることがわかった。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

寺泊町は新潟県の長い海岸線のはば中央部に位置する。北は西蒲原郡岩室村、東は同郡弥彦村・同郡分水町、南は三島郡与板町・同郡和島村・同郡出雲崎町に接し、西は日本海に面している。町域は東西15km、南北16kmと南北にやや長く、柏崎方面から伸びて来る東頭城丘陵の先端部が寺泊町付近で二つに分岐する。この分岐した丘陵のうち西の丘陵を、地元では「西山丘陵」、東の丘陵を「三島丘陵」と呼ぶので、以下の記述もこの呼称を用いることとする。西山丘陵は海岸線に平行し、北で弥彦・角田山塊へと続く。三島丘陵は信濃川に沿って伸び、寺泊駅付近では島状になり、やがて信濃川左岸で沖積面下に沈む丘陵である。これらの丘陵列に挟まれた中央部の平坦面には、島崎川が北東の新潟平野に向かって流れを作り、寺泊町は西山丘陵・三島丘陵という二つの丘陵列とその間に挟まれた島崎川が形成する谷筋により構成されていると言える。

屋舗塚は、三島丘陵の一頂点上に立地する。標高は62.8mを測り、西側の谷（水田面）との比高は約43mである。遺跡の立地する頂点は、3方向から尾根筋が集まって形成されたもので、遺跡からの眺望は周囲の丘陵の尾根などに制約されて、やや乏しい感がある。東方約1.2km先には、信濃川と越後平野を望むことができる。

2 歴史的環境

寺泊町は、その地勢から、三島丘陵から信濃川にかけての一帯、三島丘陵と西山丘陵の間の島崎川流域一帯、そして西山丘陵から日本海沿岸までの一带に三分できる。以下、町内の遺跡について概観する。

縄文時代 三島丘陵から信濃川付近一帯は町内でも最も早くから開けた地域である。町内最古の遺跡である縄文時代前期の横溝山遺跡が所在する。三島丘陵一帯にはあわせて13の縄文遺跡が存在し、この数は町内の縄文遺跡の9割にあたる。中・後・晩期の遺跡が多く、丘陵の裾部や台地の上、あるいは丘陵上の平坦面に多く立地する。縄文遺跡がここに集中する要因としては、入り組んだ谷と豊かな自然に恵まれた三島丘陵一帯が、狩猟採取を生活の基盤とした縄文社会に適していたことが考えられる。

弥生時代 全町的に遺跡数は減少する。確認された弥生遺跡は町内で5遺跡しかなく、しかし、そのうちの4遺跡が三島丘陵一帯に所在する。これらの遺跡は縄文遺跡とほぼ重なるように、丘陵先端部の微高地に立地する。碧玉・硬玉を材料とした玉造生産が知られる諏訪田遺跡では、KJ諏訪田技法、MJa諏訪田技法という独自の攻玉技法が明らかとなっており、県内の玉造文化を考える上で極めて重要である。また、弥生時代中期後半以降に帰属する土壙墓が6基確認されており、玉造集団の墓域と考えられ注目される。

古墳時代 前時代に続き遺跡数は少ない。現在までに7遺跡のみが確認されているが、やはり三島丘陵一帯に分布が集中する。多くは丘陵の裾部やその微高地に立地し、前時代から継続する遺跡が多いことから、当地で断続的に集落が営まれていたと推察される。屋舗塚遺跡から東へ約250m、同じ三島丘陵上に位置する大久保古墳群は古墳時代前期の古墳群で、前方後方墳2基、方墳1基、数基の円墳から構成される。越後平野の前方後方墳には山谷古墳（巻町）や三王山4号墳（三条市）が知られるが、大久保古墳群は形態や規模の面でこの

例と近似するという指摘がある。横瀧山遺跡に近接する舞台塚も古墳と考えられるが、発掘調査が行われておらず正確な時期は不明である。島崎川右岸に位置する土手上遺跡では、古墳時代後期の土師器と共に続縄文上器の山形沈線文に類似した文様を持つ甕が出土している。

奈良・平安時代 遺跡数が一気に増加し、49遺跡を数える。分布も町内全域に広がり、西山・三島丘陵の縁辺の緩斜面や、信濃川の左岸に接した三島丘陵先端部の微高地上に特に集中する。三島丘陵の先端部に位置する横瀧山廃寺は、県内最古の7世紀後半の寺院跡である。発掘調査の結果、木造基壇外装を持つ建物が確認され、埴仏、鶴尾、軒丸瓦、軒平瓦といった仏教的な遺物が知られる。初期越後国府の可能性も指摘され、越後の古代史を考える上で極めて重要な遺跡である。

中世 前時代と遺跡数はほぼ変わらず、立地や分布範囲も変わらない。海岸部では発掘調査例がないため具体的な様相は不明だが、現在の集落域の原型ができ上がった時代と考えられる。

その他 寺泊町では多くの塚が知られている。現在のところ63遺跡、計130基が確認されており、県内でも有数の塚の密集地域である。三島丘陵の尾根上に最も多く分布し、西山丘陵上は少ない。多くは近世以降の築造と考えられているが、大久保古墳群の存在なども考慮し、これらの塚の中に古墳時代以前に遡るもののが含まれている可能性も考えなければならない。



第1図 周辺の遺跡（弥生～古墳時代）

番号	遺跡名	時代
1	鰐穴古墳	古墳
2	蛇塚古墳	古墳
3	夷塚古墳	古墳
4	福葉塚古墳	古墳前期
5	十三宝古墳	古墳
6	赤坂塚群	弥生
7	石港遺跡	古墳
8	夕暮れの岡遺跡	古墳
9	竹ヶ花遺跡	弥生～古墳
10	浦田遺跡	弥生～古墳
11	高畠遺跡	古墳～中世
12	伝法木遺跡	古墳
13	宝塚遺跡	繩文～中世
14	本山舞台島遺跡	弥生
15	諏訪田遺跡	弥生～平安
16	横瀧山遺跡	繩文～平安
17	庚塚	古墳
18	横瀧山舞台塚	古墳
19	古屋敷遺跡	弥生～古墳
20	大久保古墳群	古墳前期
21	屋舎塚遺跡	弥生後期
22	土手上遺跡	古墳後期
23	ヤケ山遺跡	弥生後期
24	赤坂遺跡群	弥生後期
25	上桐神社裏遺跡	弥生後期
26	松ノ脇遺跡	弥生中期
27	大平遺跡	弥生後期
28	大武遺跡	繩文～中世
29	奈良崎遺跡	弥生後期～中世
30	姥ヶ入南遺跡	弥生後期終末～古墳前期
31	山田郷内遺跡	古墳～中世
32	下小島谷古墳群	古墳前期
33	門新遺跡	古墳前期～平安

第1表 周辺の遺跡一覧（弥生～古墳時代）

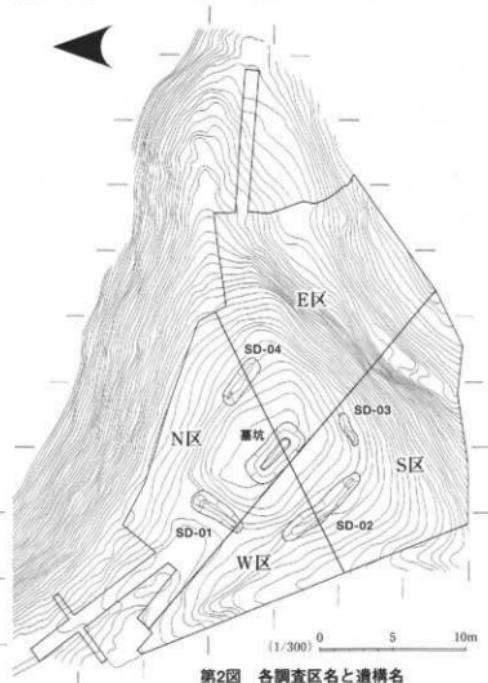
第Ⅲ章 調査の概要

1 現況と調査方法

屋舗塚の現況は山林で、遺跡の脇には尾根筋を利用して大字矢田方面から大字岩方面へ抜ける山道がある。昭和40年初頭まで矢田地区の住民が小学校の通学路として利用していたという。調査に先立ち地区の方に話をうかがったが、道を利用していた当時は屋舗塚の遺跡としての認識は薄かったようである。遺跡は3本の尾根が集まって形成された頂点上に立地するが、平成14年5月の踏査の段階で遺跡の南側に伸びる尾根は、既に上砂採取により消滅していた。

本発掘調査では確認調査時に設定したトレンチを踏襲し、墳丘上に十字に基本層序確認用のサブトレンチを設定した。このサブトレンチで区画された4つの地区を、墳丘頂点からの方位を取ってそれぞれN区、S区、W区、E区とした。また、必要に応じて随時サブトレンチを設定し層序の確認を行った。

調査では地勢の関係で重機が使用できなかったため、すべての作業を人力で行った。調査手順は以下のとおりである。①調査範囲の樹木の伐採を行い、調査区及び調査区を含む周辺の地勢を航空写真で記録した。この写真とともに調査区の現況の測量図を作成した。②調査範囲全面の表土を除去し、墳丘面の検出を行った。表土除去中に出土した遺物はいずれも墳丘面直上からの出土で、出土層位は「墳丘直上」とし、地区名及び出土地点をドットで記録した。また、遺物が特定の範囲に集中して出土する場合は、遺構に問及する可能性を考え、集中する範囲をグループとして捉え出土状況の平面図も作成した。その後の調査でこれらが遺構に伴うものと判明した場合は、遺構出土遺物として扱うこととした。③墳丘面を精査し遺構の検出を行った。遺構のプランを明確につかむため適宜サブトレンチを設定し、土層の堆積状況を観察した。④すべての遺構は、埋土の堆積状況を記録した後に完掘した。また、完掘後に平面図を作成した。遺構から出土した遺物は、遺構名、出土層位もしくは出土レベル、出土地点を記録し、1点ずつ取り上げた。ただし、小片の破片資料が集中する場合は、集中範囲をいくつかの小グループに分け、グループ



第2図 各調査区名と遺構名

ごとに取り上げた。⑤調査区及び調査区を含む周辺の航空写真を撮影した。写真をもとに発掘調査後の測量図を作成した。⑥遺構が確認できなかった範囲のうち、他の遺構との位置関係から遺構の存在が想定できる箇所にサブトレーンチを設定し、土層の観察から遺構の有無の最終確認を行った。⑦墳丘の南西半分の盛り土を除去し、墳丘構造の観察、記録を行った。この他、調査中は適宜、図面や写真による記録作成を行った。

2 調査の経過

本発掘調査 平成14年10月21日～12月18日及び平成15年3月5日～31日に実施した。実質調査期間は48日間で、実質調査面積は320m²である。遺跡全体が開発予定地に含まれていたため、調査は遺跡全体を対象とした。10月初旬に三島群森林組合へ委託し調査対象範囲の樹木の伐採を行った。続いて（有）寺泊測量設計へ委託し遺跡の現況の航空写真撮影と地形測量図の作成を行った。当初、調査は平成14年12月末日までに終了する予定だったが、この年の秋から冬にかけては例年ない長雨続きで、調査は大きく延滞した。予定していた平成14年12月末日までに調査を終了できない状況となり、事業者と再度協議を持った結果、十分な調査を実施するために調査期間を延長することで同意を得た。悪天候の続く冬季間は調査を一日中断し、天候の落ち着く3月以降に続きをを行うこととなった。

（平成14年）10月21日 作業道具を搬入し調査の準備をする。県文化行政課と調査方針を確認する。 10月22日～23日 発掘調査開始。墳丘頂部から表土除去。墳丘面直上で土器が出土し始める。 10月24日 引き続き墳丘頂部の表土除去。南東サブトレーンチを延長したところ、南東斜面で墳丘が段状の整形が認められ、後世の削平の可能性も含めて検討する必要がある。墳丘頂上部では盛り土を確認。 10月25日～11月1日 墳丘頂部から裾部にかけて表土除去が終了し、墳丘頂部とS区斜面で土器が出土する。S区斜面の土器は墳丘頂部から流れ落ちた可能性が高い。土器の取り上げを行う。墳丘は後世の削平をほとんど受けていないことがわかる。 11月6日～8日 確認調査時に見つかった周溝のプランを検出すべく墳丘裾部の遺構精査を開始。同時に北西・北東・南西・南東のサブトレーンチの幅を拡張し、墳丘の基本層序の検討・確定を行う。 11月11日 確認調査で周溝が見つからなかったS区、E区の南東斜面で土器が帶状に出土範囲あり。これが他の周溝と対応する位置関係にあることから、墳丘南東裾部の周溝にあたる可能性が考えられる。が、現状では明確な掘り方が見つからず判断を保留。 11月17日～22日 周溝の検出作業が終了し、墳丘の北西・南西・北東辺の裾部に周溝がめぐることが確認される。また周溝の巡り方から墳丘が方形であることがわかる。北西・南西辺の周溝埋土には多量の土器が含まれる。南東辺には明確な周溝が認められず、先に確認した遺物が帶状に出土する範囲を便宜的に周溝として扱む。周溝の検出状況の全体写真を撮影する。N区では直径約10cmのピットが複数検出される。墳丘の基本層序の記録を行う。 11月23日～26日 周溝の掘り下げを開始。当初、周溝は墳丘を周全すると考えていたが、実はそれそれが墳丘の隅で切れて配置されることがわかる。墳丘の北西・南西・北東辺の周溝をそれぞれSD-01、SD-02、SD-04とし、プランがはっきりしない南東辺の周溝をSD-03とした。墳丘に残していた土層ベルトを除去。 11月29日～12月4日 SD-01、SD-02、SD-04の掘り下げが終了。掘り下げと同時にSD-01・SD-02で土器の取り上げもほぼ終了。が、土器が非常にもろく時間がかかった。一部の土器

は土ごと取り上げて持ち帰る。先に南東斜面で認められた段状の整形は、戦後まで使われていた山道の形跡であると判明。 12月5日～7日 主体部を検出すべく墳頂部の精査を開始するが、明確なプランがつかめない。十字にアゼを残し平面的に浅く掘り下げながら精査を繰り返し、長方形のプランが見えたことから、これを墓坑と認定する。墓坑検出後、今後の調査方針について県文化行政課と協議を持つ。協議では現在の進捗状況では期限内に調査が終わらないこと、今後は調査に適さない厳冬期に入ることなどの問題点が出され、遺跡の重要性を考慮し調査期間の延長と厳冬期の調査の中止を事業者に了解いただく必要があるとの見解に至った。具体的には1～2月は調査を休み、3月以降に墓坑の調査を実施する方向でまとまる。 12月11日 県文化行政課との協議結果を受け、今後の調査日程について事業者と協議。事業者から調査期間の延長と延長に伴う作業員賃金等の経費の増額について了解をいただく。 12月18日 厳冬期の調査中断に備え、調査区の防雪・防風対策を行う。遺構をコンバネ・土糞で保護し、調査区全体をブルーシートで念入りに覆う。作業道具を撤去し、平成14年の調査を終了。

(平成15年) 3月3日～4日 作業道具を現場に搬入し調査再開の準備。 3月5日 調査を再開。キの字にアゼを残しながら墓坑を掘り下げる。 3月10日～18日 墓坑を掘り下げ続けるが、検出面から約90cm下がってもまだ底面が現われず。遺物も出土せず。深さが増したため、土層の記録を取り、アゼを外しながら掘り下げる。 3月19日 墓坑の掘り下げで検出面から約1mでやっと底面が現われる。底面は平らでその中央に棺跡らしき隅丸長方形の段落ちを確認。 3月20日～23日 墓坑底面から土器が出土。土器は破片で、底面直上で棺跡を囲むような配置で出土し、すべて同一個体である可能性が高い。墓坑内破碎土器共存とも理解できる。N区で検出されたピット群を完掘したが遺物は出土せず、規模や形状からも樹木の根跡と判明。 3月24日 発掘調査後の遺跡の全景をラジコンヘリコプターで撮影する。 3月25日～27日 墓坑底面の棺跡を完掘する。棺内から緑色凝灰岩製の管玉が2点のみが出土する。SD-01を断ち割り、掘り方の確認を行う。 3月28日 プランが明確につかめないSD-03の掘り下げと土器の取り上げを行う。他の周溝に比べて短く浅いが、溝が確認できる。その後、現地説明会の準備をする。 3月29日 10:00～15:00に現地説明会を開催。天候に恵まれ120名余の見学者でにぎわう。 3月30日 S区・W区の墳丘盛り土を除去。周溝が切れる墳丘の四隅の数ヶ所にサブトレーンチを設定。結果、周溝は隅まで巡らないことが判明。 3月31日 道具の撤去と現場の環境整備を行い、調査を終了。

整理作業 本発掘調査が平成14年度末まで伸びたため、遺物の整理と報告書の作成は平成15年度に行った。出土した土器は非常にろく耐久性に乏しかったため、まず次のような方法で器面の補強を行った。①土器表面に付着した土を、竹串や刷毛を使って除去する。このとき水はなるべく使わない。②土器の表面にバインダーを塗布する。特にろい土器には、表面に和紙を裏打ちしながらバインダーを塗布した。バインダー塗布後は土の除去ができなくなるため、①の段階で徹底的に土を落しておくことが重要となる。乾いたバインダーはアセトンで溶かすことができるが、アセトンは人体に有毒で揮発性があるため、取り扱いに注意し、防毒マスク・ゴム手袋の着用や換気の良い部屋での作業が必須である。なお、この保存処理にあたっては(財)新潟県埋蔵文化財事業団の指導を受けた。

第IV章 遺構・遺物

1 墳形・規模・外部施設

調査の結果、方形の墳丘を一基確認した。墳丘は後世の削平をほとんど受けていない。表土を10~20cm除去すると墳丘面が現れる。墳丘の形状は方形で、その裾部に4本の周溝を配置し、これにより墳丘の範囲が規定される。周溝はまわりから伸びてくる尾根を断ち切る役目も果たしており、尾根に直行する北西辺、南西辺、北東辺の周溝はしっかりと掘り込まれている。以上のことより、広義の意味での方形台状墓と考えたい。墳丘規模は周溝外端で一辺約10.5m、周溝内端で1辺約8.7mを測る。高さは1.2m、墳頂部には平坦面が広がる。各周溝の概要は以下のとおりである。

SD-01 墳丘の北西辺を区画する周溝で、N区・W区に位置する。北西方向から墳丘に向かって伸びる尾根を断ち切る役目も果たす。墳丘の北西裾部に平行しながら北東-南西方向に伸び、長さ3.7m、幅0.8~1.3m、深さ0.6~1.0mを測る。平面の形状は長楕円形で、北東端が広く南西端で狭い。横断面は逆台形を呈し、底面は幅25~35cmの平底である。他の4つの周溝のうち最も深く鋭く掘り込まれている。埋土は上層（黒褐粘質土）、中層（黄褐粘質土）、下層（暗黄褐粘質土）の3層に大分され、上・中層から遺物が出土した。

SD-02 墳丘の南西辺を区画する周溝で、S区・W区に位置する。南西方向から墳丘に向かって伸びる尾根を断ち切る役目を果たす。墳丘の南西裾部に平行しながら南西-北東方向に伸びる。長さ6.0m、幅1.0~1.1m、深さ0.5~0.6mを測り、平面形状は長楕円形である。横断面の形状は逆台形、溝中央部で幅30~40cmの水平な底面を持つが、溝端部に近づくと丸底となる。長さに比べて掘り込みの角度が緩やかなのが特徴的である。埋土はSD-01の3層に最下層（黄褐粘質土）を加えた4層に大分され、最下層は染造まもなくして墳丘の盛り土が流れ込んだものと考えられる。周溝の両端の中層から遺物が出土した。

SD-03 墳丘の南東辺を区画する周溝で、S区・E区に位置する。南東の急斜面に掘り込まれる。墳丘の南東裾部に平行しながら北東-南西方向に伸び、長さ2.1m、幅0.5~0.6m、深さ0.2~0.3mを測る。平面の形状は変形した長楕円形で、底部は丸く、北東端で特に浅くなり落ち込み状になる。今回検出した4つの周溝のうち最も短く浅い。埋土は黄褐粘質土である。

SD-04 墳丘の北東辺を区画する周溝で、N区・E区に位置する。北東方向から墳丘に向かって伸びてくる尾根を断ち切る役目も果たしている。墳丘の北東裾部に平行しながら北東-北西方向に伸び、長さ3.3m、幅1.1m、深さ0.7~0.5mを測る。平面の形状は北東端がやや角張る長楕円形、横断面の形状は逆台形で幅10~15cmの水平な底面を持つ。底面は両端部に近づくほど狭くなる。SD-02に次いで鋭く掘りこまれた周溝である。埋土はSD-01と同様に3層に大分され、上層から墳頂部からの流れ込みと思われる遺物が出土した。

なお、各周溝の埋土の観察から、いずれの周溝も掘削されたのち比較的短い時間で埋没していく様子がうかがえる。調査地の地山は基本的にシルトを含むきめの細かい粘質土で、雨が降るとすぐに流れやすいという性質を持つ。調査時には少量の雨ですぐに足元が滑りやすくなり、非常に苦労させられた土質でもある。

2 墓葬施設

墓坑は墳頂部の中央にある。副葬品である管玉の出土状況から、埋葬頭位を南東方向に取ると考えられる。墓坑は掘り方で全長4.1m、幅1.9mを測り、深さ1.0mである。平面形は隅丸長方形を呈す。地表面から底面にむかってほぼ垂直に掘り込んでおり、墓坑底面での全長は3.4m、幅1.2~1.5mを測り、頭位にあたる南東部がやや広い。底面の中央で棺を安定して据えるための浅い掘り込み（棺跡）を確認した。この棺跡から推測される棺の規模は、全長250cm、幅45~60cmで、平面形状は幅が狭い長方形を呈し、やはり頭位にあたる南東部が広い。検出面（墓坑底面）からの掘り込みの深さは10cmを測る。掘り込みの底面が緩やかな丸みを持つことから、墓坑内に埋葬された棺は、刎抜き式の木棺と考えられる。

掘り込み内の埋土を観察すると、棺底にあたる最下層で厚さ約5cmの黄褐色砂質土が確認できる。この黄褐色砂質土層は、一見すると自然堆積層と見間違うような非常にきめのそろった砂質土である。しかし、さらに観察すると、この黄褐色砂質土は自然堆積とは明らかに異なり、人為的に敷かれたものと判断される。推測の域を超えないが、ここではこの層を棺を据えるための裏込として考えたい。

主な遺物として、棺据え置き用の掘り込みの脇で土器の破片が並んで出土している。出土レベルは墓坑の底面直上で、出土状況から墓坑内破碎土器共軸の一例とも考えられる。また、棺内南東隅では、緑色凝灰岩製の管玉が2点出土した。

3 墳丘の造成

墳丘の造成は以下の手順で行われている。①尾根頂点の高まりを方形に削り出して成形する。墳丘裾には周溝を掘削する。②周溝掘削時の廃土を利用して、墳頂部にのみ約10cmの厚さで盛り土を施す。盛り土に使用される廃土は、均質な黄褐色粘土に限定される。③墳頂部に墓坑を掘り、棺を安置した後、墓坑を埋め戻す。埋め戻しに使われる土は、墓坑を掘る際に出した廃土がそのまま利用される。④周溝掘削時の廃土を利用して、墳頂部を中心に約10cmの厚さで盛り土を施す。この盛り土は化粧土のような役割を果たしており、使用される土は周溝の廃土とはいえない、均質な黄褐色粘土に限定される。墳丘の各方向に入れたサブチレンチでの土層確認では、この最後の盛り土が確認されることが多く（d・e・hサブトレ）、当初からやや広い範囲に化粧土として盛り土を施したという見方と、墳丘上に施されていた盛り土が後の風雨によって墳丘裾まで流されたという2通りの見方がある。屋舗塚の場合は、後者の要素も少なからず含むと思うが、前提として前者のような行為があったと考えられる。

今回の調査では特に地山の認定に時間を要した。遺跡の墳頂部では、白色の粘土ブロックを含んだ黄褐色粘土と黄褐色粘土との互層が平均的に堆積しており、一見するとこれを盛り土と判断しやすい。しかしこの上層には、水性堆積によるシルト層と粘土層の互層からなる「地山①」が存在し、必然的にその下層に当たる黄褐色粘土と黄褐色粘土との互層も自然堆積層であるという結論に至った。本書ではこれを「地山②」として記している。

また、N区のSD-01の付近においては、2~5cm大の白色の粘土ブロックを多量に含んだ黒褐色粘土層の広

がりを確認した。墳頂部で確認した上記の工程②、④に該当する盛り土との関係は不明だが、土質にしまりがなく、含まれる粘土ブロックは明らかに地山掘削時に掘り出されたものであり、整地のような目的であえてこの箇所のみに敷かれたものかと当初考えた。サブトレンドで堆積状況を確認し、この黒褐粘質土の広がりと墳丘の関係などから検討した結果、この黒褐粘質土は、墳丘築造以降に堆積したことは間違いないが、墳丘の築造に伴って施された盛り土と見るのは、やや難しいという結論に至った。明らかに人為的な何らかの行為に関連した堆積であるが、土質のしまりかた、土質の内容からは墳丘の築造よりはるかに新しい時期のものとも考えられ、この墳丘に伴う盛り土とは考えないでおきたい。

4 出土遺物

遺物はすべて方形台状墓に伴うもので、概ね弥生時代後期に帰属するものである。周溝・墓坑内、墳丘上面からコンテナ約5箱分の土器が出土し、墓坑の棺内からは管玉が2点副葬品として出土した。

墓坑 墓坑底面の棺の両脇で棺を囲むような位置取りで土器が出土した。また、棺内から副葬品の管玉が2点出土した。1は棺北東脇の墓坑底面直上から出土した、小型の壺の口縁と思われる破片である。摩滅が著しく調整は不明だが、外面にヘラミガキ調整が施されていた可能性がある。2は棺南西脇の墓坑底面直上から出土した、小型の壺の底部片で、外面底部付近に縱方向のヘラ削りが施される個体である。内面は摩滅が著しく調整は不明だが、わずかに残された調整痕から左上がりのナデないしハケ調整があったものと思われる。胎土・焼成などの点から1・2は同一個体であると考えられる。3・4は、棺内から出土した緑色凝灰岩製の管玉である。3は長さ1.38cm、径2.5~2.65mmで、孔径は1.2~1.3mmを測り、断面形状は楕円形である。4は長さ1.22cm、径3.3~3.5mm、孔径1.4~1.5mmで、断面形状は11面の研磨面を残す円形である。3・4とも緑色凝灰岩としては比較的硬質なものである。ともに棺内最下層の黄褐砂質土から出土した。

SD-01 墓土の上・中層から土器が出土した。出土状況から、墳頂部に置かれていた土器が後にSD-01に流れ込んだと考えられるグループと、当初からSD-01付近に置かれたものと考えられるグループとに分けられ、ここで紹介する土器は後者のグループに属する。5・6は、SD-01の中央、北西壁に接して折り重なるようにして出土した壺である。5は壺の体部上半で、口縁部は強い横ナデ、体部内面は横方向のヘラ削りが施される。肩部に施された流れるような刺突文がある。これは四線文系の影響も考えられる。6は5の底部にあたり、外側は体部から底部に及ぶまで縱方向の密なハケ調整、内面は剥離のため調整は不明である。外側には二次焼成の痕跡が認められる。5・6とともに弥生時代中期末から後期の時期を考えたい。7は5・6の下部から出土した壺である。口縁部付近には強い横ナデによるナデの後線が残る。口縁端部を上方につまみ上げ、口縁部外側はやや凹んだ面を持つ。体部外面上半は斜め方向の粗いハケ調整であるが、底部に近づくに従って密な縱ハケが施される。底部外側には二次焼成の痕跡も認められた。内面の頸部以下では横方向のヘラ削りが顕著に認められる。弥生時代後期のものである。

SD-02 墓土の中層から土器が出土した。出土地点は溝の両端に集中する。8は壺ないし広口壺の口縁である。口縁部は強い横ナデによりやや外反して開き、口縁端部は隅丸で小さな面を持つ。体部外側は粗い縱ハケが施

され、内面調整は不明である。9は壺の底部で、外面は密な縦ハケの後、底部付近のみに縦方向の削りを施す。内面は摩滅のため調整不明であるが、わずかに残る調整痕から横方向のハケないしナデ調整が施されていたと考えられる。底部外面は二次焼成を受けている。10は長頸壺の口縁部である。口縁部外端に貼り付けられていた粘土帯が剥離しており、剥離面（貼り付け面）に密なハケ調整が施されているのがわかる。内面は横方向のヘラミガキで、外面は調整不明だが同じく横方向のヘラミガキが施されている可能性が高い。11は長頸壺の口縁部である。口縁部が端部付近で外方に屈曲し、端部は尖り気味、口縁部外面に面を持つ。内外面ともに剥離が著しく調整は不明であるが、口縁部外面ではミガキ調整が認められる。弥生時代後期前半の要素が残る。12はラッパ状に聞く長頸壺の口縁部で、口縁部外端に粘土帯を貼り付けて肥厚させる個体で、貼り付け面には10同様、密なハケ調整が認められる。口縁端部から内面にかけて丁寧なナデを施していることがわかる。13は長頸壺の頸部である。体部と頸部との境に断面三角形の突帯を貼り付ける。突体部分には丁寧な横ナデが施され、外面に赤彩が認められる。14は壺の底部である。外面は縦方向の密なヘラミガキを施し、内面底部付近はヘラ削り、体部は横ハケが認められる。

SD-04 墳丘からの流れ込みと思われる土器が、溝埋土の上層から数点出土した。15～17は器台ないし高坏の破片で、すべて同一個体である。また、後で記述する20～24もこれと同一個体であることを、付け加えておく。15は脚部または口縁部付近にあたると考えられる、断面三角形の貼り付け突帯を持つ破片である。外面は密な縦方向のハケ調整を施した後、同じく縦方向のヘラミガキを行う。内面にもやはり密な横ハケを施し、内外面ともに赤彩が認められる。内面下端にある剥離面に接合するのは、16のような波状文を持つ破片と考えられる。実際、22にその関係を見る事ができる。16は脚部に当たると考えられる破片で、端部にしっかりとした面を持つ。外面に凹線を2条めぐらせ、その間に4条の串描き波状文を流麗なタッチで描く。さらに端部外面には竹管文を施している。内面は密な横方向のハケ調整で、内外面ともに赤彩が認められる。17は16同様、外面に凹線と波状文をめぐらせる個体である。18は壺かまたは壺器台か、器種が不明である。大きく聞く口縁部の先端が、強い横ナデによって外反しながら短く立ち上がる。口縁端部は面を持つ。外面には密なナデまたはミガキが施されており、内面の調整不明である。内外面ともに赤彩されている可能性がある。

埴丘上面 墳頂部の墓坑付近、SD-03の東端付近で土器が集中して出土した。19は墓坑上で出土した、器台または高坏の脚柱部で、内外面とも剥離が著しめため調整は不明である。20～24は、SD-04の15～17と同一個体と考えられる、器台あるいは高坏の破片である。20はその口縁部にあたると考えられ、横ナデにより丁寧に仕上げられている。内溝気味に立ち上がる口縁の内面をわずかに肥厚させ、口縁端部には小さな面を持つ。21は15同様、突帯をもち、外面に縦ハケ、内面に横ハケが施される。22は、やはり突帯を持つ破片である。23はやはり脚部付近の破片で4条の串描き文を持つ。24は脚部にあたると考えられる破片で、16同様、波状文がめぐり、口縁端部に竹管文を施している。内外面とも赤彩が確認できる。

No	出土位置・層位	種別	法量(cm)	残存率	焼成	胎土	色調	備考
1	墓坑底面直上 棺北東脇	弥生土器 壺	復元口径11.0 現存高4.0	口縁部1/8	b 細砂含む	B 細砂含む	5YR5/8 赤褐色	2と同一個体
2	墓坑底面直上 棺南西脇	弥生土器 壺	復元底径2.8 現存高5.4	底部～ 体部下半1/4	a 細砂含む	A 細砂含む	7.5YR6/8 明橙褐色	1と同一個体
3	墓坑棺内最下層 南東端	管玉	長さ13.8 径2.5～2.65mm	完存			緑灰	緑色凝灰岩製
4	墓坑棺内最下層 南東端	管玉	長さ12.2 径3.3～3.5mm	ほぼ完存			明緑灰	緑色凝灰岩製
5	SD-01上・中層	弥生土器 壺	復元口径18.9 現存高11.5	口縁部～ 肩部1/2	a 細砂含む	A 細砂含む	5YR6/6 灰橙	6と同一個体
6	SD-01上・中層	弥生土器 壺	復元底径5.0 現存高6.0	底部完存	c 細砂含む	C 細砂含む	5YR5/6 赤褐色	5と同一個体
7	SD-01上・中層	弥生土器 壺	復元口径15.5～底径4.1 復元器高18.7	口縁部～ 底部1/2	a 細砂含む	A 細砂含む	7.5YR6/6 明橙褐色	
8	SD-02中層	弥生土器 壺or広口壺	復元口径16.0 現存高7.0	口縁部1/4	a 細砂含む	A 細砂含む	10YR6/6 明黄褐色	
9	SD-02中層	弥生土器 壺	復元底径3.5～3.8 現存高7.1	体部下半1/6	a 細砂含む	A 細砂含む	10YR6/6 明黄褐色	
10	SD-02中層	弥生土器 長頸壺	復元口径17.0 現存高2.4	口縁部1/8	a 細砂含む	A 細砂含む	10YR6/6 明黄褐色	
11	SD-02中層	弥生土器 長頸壺	不明	口縁部～ 頸部1/4	a 細砂含む	C 細砂含む	5YR5/6 赤褐色	
12	SD-02中層	弥生土器 長頸壺	復元口径22.0 現存高10.0	口縁部1/6	a 細砂含む	C 細砂含む	5YR6/8 橙	
13	SD-02中層	弥生土器 長頸壺	現存高3.5	頸部1/4	a 細砂含む	A 細砂含む	10YR6/6 明黄褐色	
14	SD-02中層	弥生土器 壺	底径4.1 現存高7.1	底部3/4	a 細砂含む	A 細砂含む	10YR6/6 明黄褐色	
15	SD-04上層	弥生土器 器台or高坏	不明	破片 (脚部付近?)	a 細砂含む	A 細砂含む	10YR7/6 明橙褐色	15～17・20～ 24は同一個体
16	SD-04上層	弥生土器 器台or高坏	不明	破片 (脚部?)	a 細砂含む	A 細砂含む	10YR7/6 明橙褐色	15～17・20～ 24は同一個体
17	SD-04上層	弥生土器 器台or高坏	不明	破片 (脚部付近?)	a 細砂含む	A 細砂含む	10YR7/6 明橙褐色	15～17・20～ 24は同一個体
18	SD-04上層	弥生土器 壺or壺	復元口径25.0	口縁部1/12	a 細砂含む	A 細砂含む	10YR6/6 明黄褐色	
19	N区墳丘面墓坑上	弥生土器 器台or高坏	脚柱径4.8 現存高8.7	脚柱部完存	b 細砂含む	A 細砂含む	10YR6/6 明黄褐色	
20	S区墳丘面 SD-03東端	弥生土器 器台or高坏	不明	破片 (口縁部)	b 細砂含む	A 細砂含む	10YR7/6 明橙褐色	
21	E区墳丘面墓坑上	弥生土器 器台or高坏	不明	破片 (脚部付近?)	a 細砂含む	A 細砂含む	10YR5/4 灰黃褐色	15～17・20～ 24は同一個体
22	N区墳丘面墓坑上	弥生土器 器台or高坏	不明	破片 (脚部付近?)	a 細砂含む	A 細砂含む	10YR4/4 褐	15～17・20～ 24は同一個体
23	N区墳丘面墓坑上	弥生土器 器台or高坏	不明	破片 (脚部付近?)	a 細砂含む	A 細砂含む	10YR5/4 灰黃褐色	15～17・20～ 24は同一個体
24	N区墳丘面墓坑上	弥生土器 器台or高坏	不明	破片 (脚部?)	a 細砂含む	A 細砂含む	10YR6/4 灰黃褐色	15～17・20～ 24は同一個体

(凡例) ・焼成は 良好：a やや良好：b やや軟：c 軟：d と表す

・胎土は 密：A やや密：B やや粗：C 粗：D と表す

・土器の色調は『標準土色帳』(農林省農林資産技術会議事務局監修 1965年版)に準じる

第2表 出土遺物観察表

第V章 まとめ

ここでは若干の考察を加えつつ、屋舗塚遺跡の意義についてまとめてみたい。

方形台状墓の認定 本書では屋舗塚遺跡を方形台状墓と認識する。屋舗塚は墳丘各辺の裾部に4本の周溝が配置される。この周溝の在り方は、弥生中期・後期に見られる方形周溝墓のそれと近似し、この点から屋舗塚を方形周溝墓の一種とみなすこともできる。しかし、屋舗塚が一般の方形周溝墓と明らかに異なるのは、丘陵尾根の頂点という高所に、単独で造営される点である。和田晴吾氏は方形台状墓の基本型式を次のように分類する〔和田2003〕。「丘陵上の平坦地に地山の削り出しと若干の盛り土で造られたもの（a類）」「細い丘陵の尾根を丘陵に直行する溝で区切ったもの（b類）」「丘陵先端の急斜面を階段状に加工したもの（c類）」の3類である。加えて、このような「基本類型はしばらくすると地域的な変容や基本型式各要素の複合といった現象を示すようになる」と、周溝墓と台状墓の複合も含めてバラエティーに富んだ台状墓、周溝墓の存在を認めている。和田氏の分類案によれば、屋舗塚はa類とb類の特徴を持ち、なおかつ周溝墓に影響を受けた広義の意味での方形台状墓として捉えられる。なお、屋舗塚と同じ尾根筋上の東へ50mのところに、一辺6mの墳丘が確認されており、屋舗塚と一緒に造墓活動で築かれた墳墓として考えたい。屋舗塚周辺では土砂採取により尾根の大半が失われており、既に失われた尾根筋にもいくつかの墳墓が造営されていた可能性が考えられる。

築造時期の問題 屋舗塚では墓坑、周溝、墳丘上面から土器が出土した。いずれも葬送儀礼に伴う土器と考えられ、時期については当初、弥生時代後期後半（法仏式併行期）と捉えていた。しかし、整理作業の過程で一部の土器には弥生時代後期後半より古い要素が認められるという指摘を受けた。SD-01出土の甕5・6は弥生時代中期に近い凹線文系の要素が認められ、またSD-02出土の長頸壺11は弥生時代後期前半に遡る可能性がある。一方、今回の調査で確認された「墓坑内破砕土器供獻」の時間的位置付けや、墳丘に埋葬施設を一つしか持たないという、ある程度確立された首長墓としての在り方などを考えると、やはり後期後半以降の時代的特色が強く感じられる。ただし、福井県太田山1号墳や西大井2号墳のように、北陸南部では弥生時代中期末の段階に方形周溝墓（台状墓）が一時的に造営されるという事例も知られており、屋舗塚が新潟県でのその類例になるという可能性も現段階では否定できない。出土土器による屋舗塚の時間的位置付けの検討は必須の課題であるが、それは今後別稿にて行うこととし、ここではその造営時期について、非常に曖昧ではあるが弥生時代後期とだけ捉えておきたい。なお、県内での弥生時代後期の方形台状墓の確認例は少なく、長岡市藤ヶ森遺跡などが知られるのみである。藤ヶ森の台状墓は、屋舗塚と同様、平地より一段高い丘陵裾に築かれ、その選地には視覚的な効果に重きが置かれている。

墳丘の造営法 和田氏は墓坑を掘り込む工程に関して、「盛土終了後に掘り込むもの（掘込墓坑a類）」「盛土の途中で掘り込むもの（掘込墓坑b類）」「盛土前に地山に直接掘り込むもの（掘込墓坑c類）」の3類を提示する〔和田2003〕。屋舗塚では、まず地山を削り出して大まかな成形をした後、墳頂部に整地程度の盛り土を行い墓坑を掘り込む。その後、墓坑内に棺を安置し、墓坑を埋め戻し、最後に墳頂部全体に10cm程度の盛り土を施す。この築造法は上記の分類のうち掘込墓坑b類に該当し、台状墓ではb・c類が基本であったと指摘する和田氏の見解にも合致する。

巨大な墓坑 屋舎塚の特徴のひとつにその巨大な墓坑があげられる。全長4.1m、幅1.9m、深さ1.0mという規模の墓坑は、県内ではこれまで確認例がない。北陸地方全域では、石川県金沢市七ツ塚墳墓群の方形台状墓C3号墓坑や、福井県鯖江市王山墳墓群4・9号墓主体部など、いくつかの類例が散見するが、これらの例も屋舎塚に比べて掘り込みが浅いなど若干の違いがある。1mものの深さをほぼ垂直に掘り込む墓坑の形態は、やや飛躍する感があるが、北陸南西部よりさらに西の丹後地方や出雲地方の事例に近いと考えられ、当時の海路を介した文化交流が推察される。なお、屋舎塚の墓坑、壁面の角度の観察から3回程度（約30cmずつ）に分けられて掘削されたと考えられる。

木棺と裏込 墓坑底面の中央では、棺を安定して据えるための浅い掘り込みを確認した。この形状から墓坑内に安置された棺は、領抜き式の木棺であったと考えられる。この掘り込み内の埋土の最下層には、木棺底に沿うように約5cmの厚さで黄褐色砂質土の堆積があり、本書ではこれを木棺据え置き用の裏込と考えている。

墓坑内破碎土器供獻 墓坑底面直上で棺を囲むように土器が並んで出土した。すべて破片資料であり、調整や胎土、焼成等の観察から、これらは同一個体である可能性が高いと判断した。出土状況から、葬送儀礼に伴ういわゆる「墓坑内破碎土器供獻」の一例と考えられる。墓坑内破碎土器供獻は、弥生後期に主に丹後・但馬地方といった北近畿で盛行する土器供獻儀礼で、北陸地方では福井県清水町小羽山墳墓群で四隅突出形墳墓等に伴って確認されているが、それより以東の石川・富山・新潟ではこれまで知られていなかった。のことより今回の屋舎塚での墓坑内破碎土器供獻の確認は極めて、重要である。なお、棺内からも少量の土器の破片が出土している。これらの土器は棺底から5～7cm浮いた状態で出土することから、墓坑内の土器の供獻儀礼は、棺を安置した後に行われたと考えられる。また、棺内南東隅では緑色凝灰岩製の管玉が2点出土し、その位置から埋葬頭位を南東に取っていたことが推察できる。

周溝掘削の意義 屋舎塚の周溝は、墳丘をより高く見せるという視覚的な狙いと、墳丘範囲の規定という2つの意味を持つ。墳丘の北西・南西・北東裾に配置された周溝SD-01・SD-02・SD-04は、墳丘に向かって伸びてくる尾根筋に直行して掘削されており、尾根筋を切断する役割を果たす。対して、急斜面を背後に控えた墳丘南東辺に配置された周溝SD-03は、切るべき尾根が無いためか他の周溝よりも規模が小さく平面形も不定形である。加えて、この墳丘南東辺では自然地形の急斜面が墳丘の高さを際立たせる視覚効果を果たしており、周溝掘削により墳丘を高く見せようという意識が、さほど働かなかったと考えられる。

葬送に伴う土器供獻 屋舎塚では周溝及び墳丘上面から多くの土器が出土している。その出土状況を見ると出土地点に明らかに偏りがあり、この状況がかつて行われた土器供獻儀礼の一端を表していると考えられる。墓坑の真上の墳丘上と、周溝内ないし周溝脇での土器の出土が多く、土器供獻儀礼もこの辺りで行われた可能性が高い。出土状況から儀礼は複数回にわたるものでなく、一回にあるいは短期間に行われたものと考える。つまり、今回出土した土器は、弥生時代後期の葬送儀礼に伴う一括資料として扱うことができ、非常に重要な基準資料となる可能性が高い。器種では甕、壺が多く、出土状況から墳頂部には器台または高壙が供えられたと考えられる。墳頂部で出土した、外面を波状文と竹管文で飾り赤彩する、大型の器台ないし高壙の破片は、北陸地方では類例がなく、やはり丹後地方に多く見られる資料である。この点にも、屋舎塚が、丹後以西の日本

海沿岸地域の影響を如実に受けたことがうかがえる。

正面観の問題 屋舎塚の正面観はどこにあるか。まず、墓は母集落に対して正面観を持つという観点から考えてみたいが、屋舎塚の周囲では同時期に営まれた集落遺跡が未だ知られていない。また、集落が立地するような顕著な平野部もない。そこで少し視点を変え、周溝の配置状況などから一案を提示してみる。屋舎塚の周溝の配置では、SD-01とSD-04の間が非常に広く空いており、このスペースから棺を運び入れた（墓道）と仮定できる。SD-04で出土した土器はすべて埴丘からの流れ込みと考えられ、SD-04単独での土器供獻儀礼は行わなかった可能性が高い。のことより、SD-04は葬送儀礼に重要でない側は裏側であると考えられ、必然的に正面はそれに対するSD-02ということになる。SD-02は4本の周溝のうち最も長く、土器供獻儀礼も北東隅と南西隅の2か所で確認でき、正面たる要素を備えていると言える。このことから、本書では屋舎塚の正面観を南西面に求めたい。南西面の先には、丘陵尾根に挟まれた狭い谷が存在しており、あるいはこの辺りに集落が展開するかもしれない。

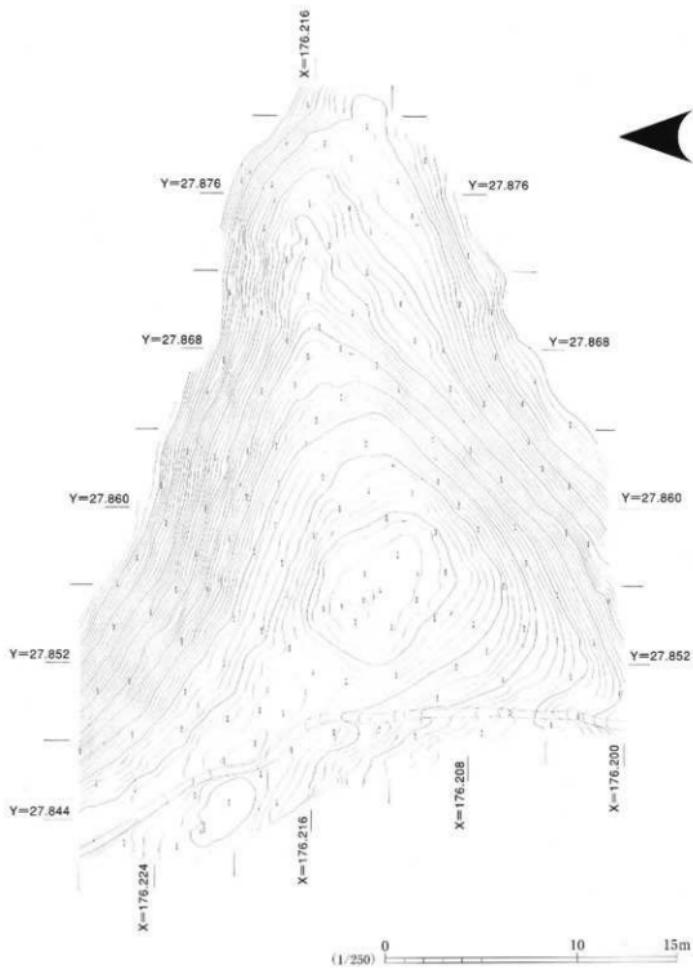
屋舎塚遺跡の前後 周辺の主な弥生後期の遺跡には、方形周溝墓が確認された奈良崎遺跡や環濠を持つ高地性集落である赤坂遺跡群などがある。奈良崎は西山丘陵上に立地し、三島丘陵上に立地する屋舎塚とは別の系統の首長墓と考えられるが、同時代に狭い地域の中で周溝墓や台上墓といった様々な形態の墳墓が受容されている事実が興味深い。古墳時代前期には屋舎塚の東250mに位置する大久保古墳群（前方後方墳2基ほか）の造営が始まる。弥生時代後期に西の影響を強く受けた方形台状墓を受容した地域が、古墳時代前期には前方後方墳を受容する。弥生時代後期の素地が、いち早い古墳の受容に繋がったとも考えられ、弥生時代から古墳時代への繋がりが追える地域として注目される。

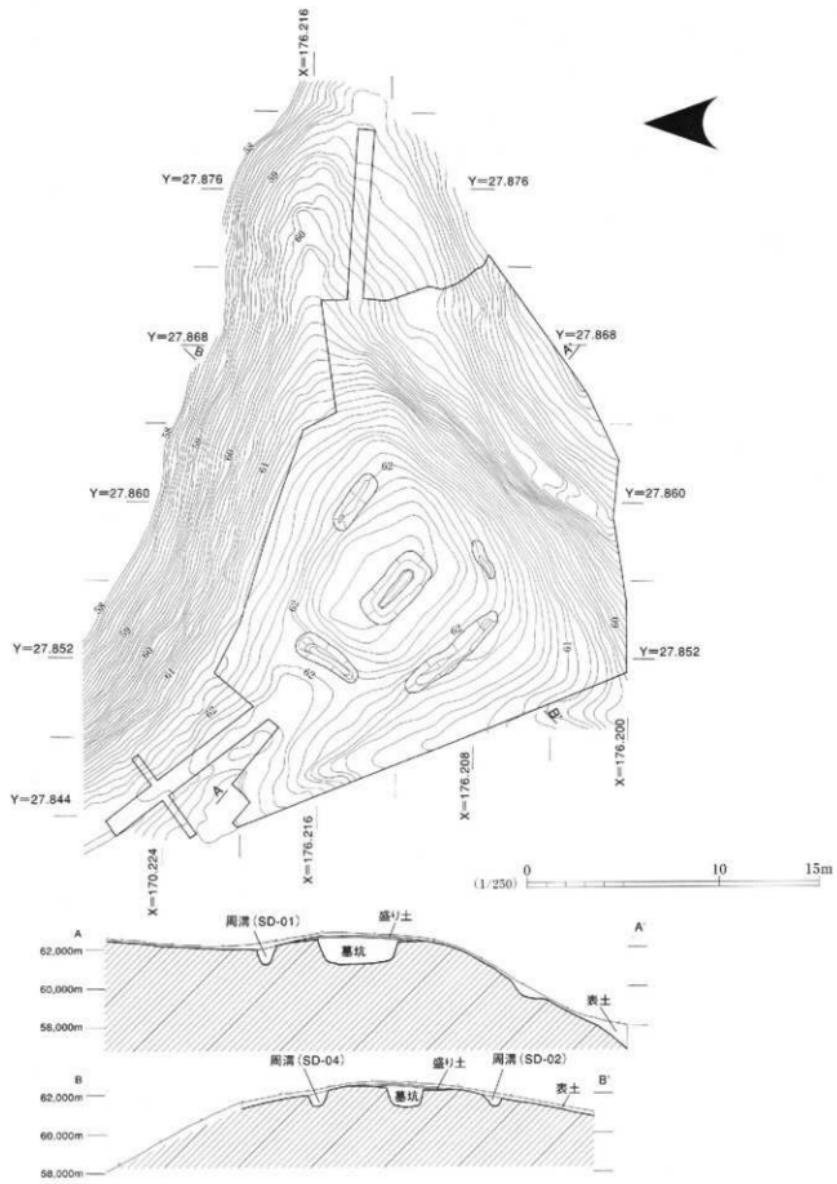
屋舎塚遺跡の意義と被葬者像 屋舎塚の調査の成果は、これまで知られていなかった新潟の弥生時代後期における方形台状墓の全容が、初めて明らかになった点に尽きる。そしてその随所に、丹後地方や出雲地方の葬送文化に通じるような要素が見られたことは大きな驚きであった。屋舎塚で見られたそれらの要素は非常に純粋で、直接的な伝播さえも推測させるような生々しさを持つ。弥生時代後期における日本海を介した文化交流の一端を示す代表的事例となるだろう。最後にその被葬者についてだが、副葬品の内容などからこの墓に葬られたのは当地域を治める首長クラスの人物と考えられる。しかし、その掌握地域はそれほど広い範囲を想定しない。また、この種の台状墓が以降断続的に築かれるという見方は現状ではできない。

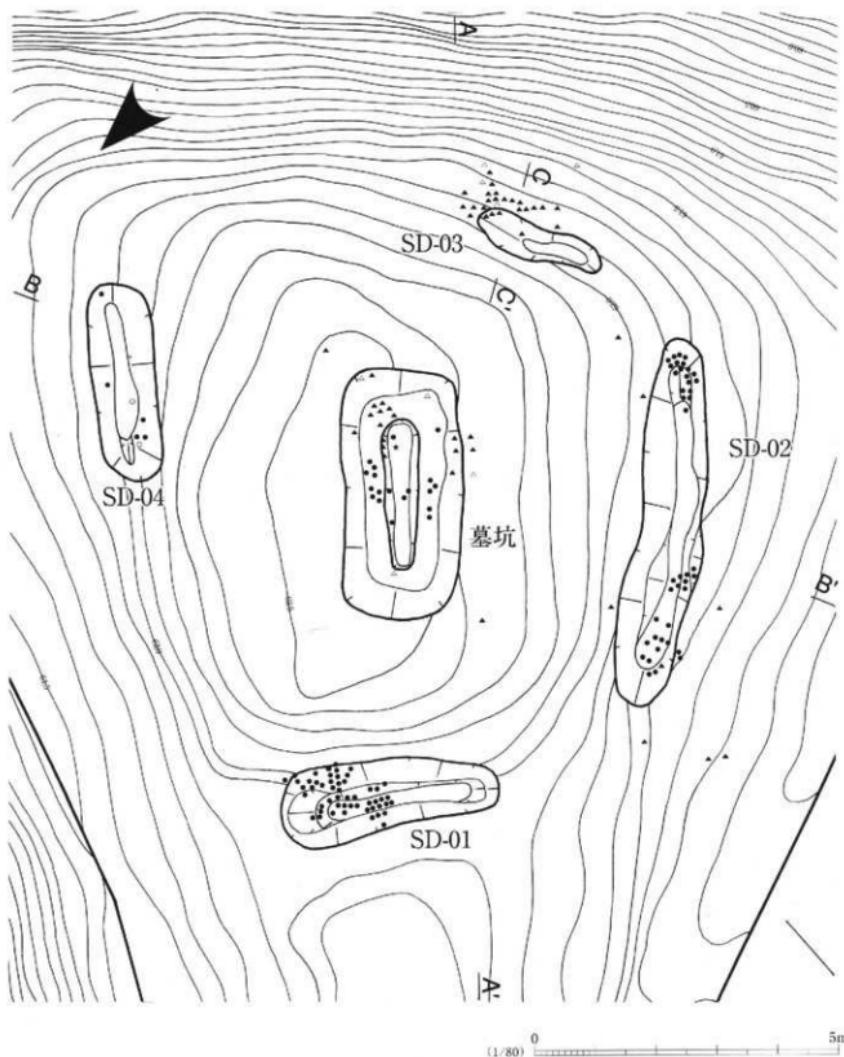
【参考・引用文献】

- 石川日出志 1999 「第3章5-1 弥生時代の墓と墓地」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会編 高志書院
春日 真実 2002 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集 奈良崎遺跡」 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
寺村 光晴 1991 「大久保古墳群」「寺泊町史」資料編1原始・古代・中世 寺泊町
肥後 弘幸 1996 「弥生墳墓における土器供獻—丹後の場合—」『YAY！弥生土器を語る会20回達成記念論文集』 弥生土器を語る会
肥後 弘幸 2000 「岩瀬町文化財調査報告書第15集 大風呂南墳墓群」 岩瀬町教育委員会
福永 伸哉 1988 「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号 考古学研究会
吉川 登 2001 「北陸地方における弥生時代墓制の特質」『古代文化』VOL.53 財團法人古代学協会
前田 清彦 1999 「北陸の木棺墓とその展開」『北陸の考古学』 石川県考古学研究会会誌 第42号 石川県考古学研究会
和田 順吾 2003 「弥生墳丘墓の再検討」『古代日韓交流の考古学的研究—墓制の比較研究—』 平成11年度～平成13年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書

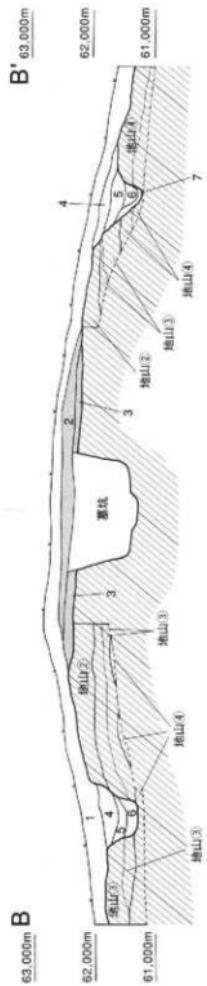
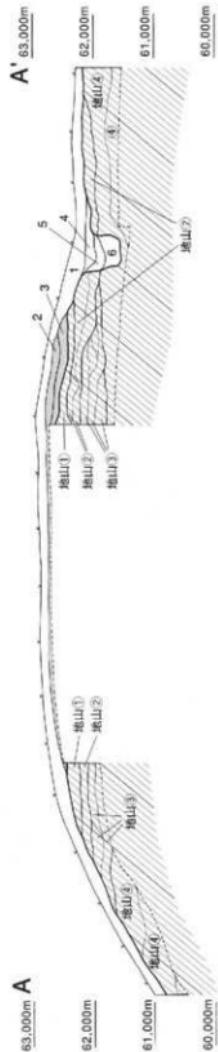
図 版



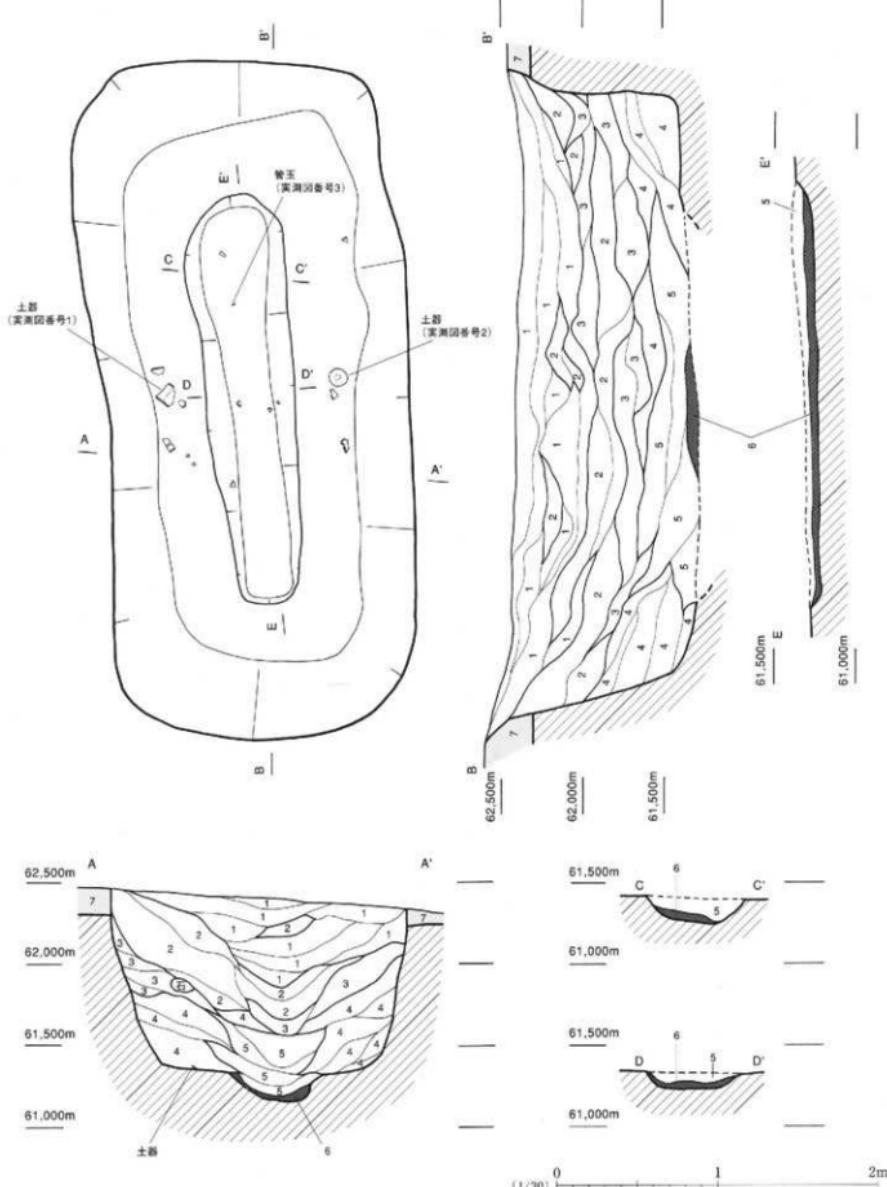




凡例: ▲ 墳丘上面出土土器 △ 墳丘上面出土土器(波状文・竹管文を有するもの) ● 遺構出土土器
 ○ 遺構出土土器(波状文・竹管文を有するもの) ★ 墓坑出土管玉



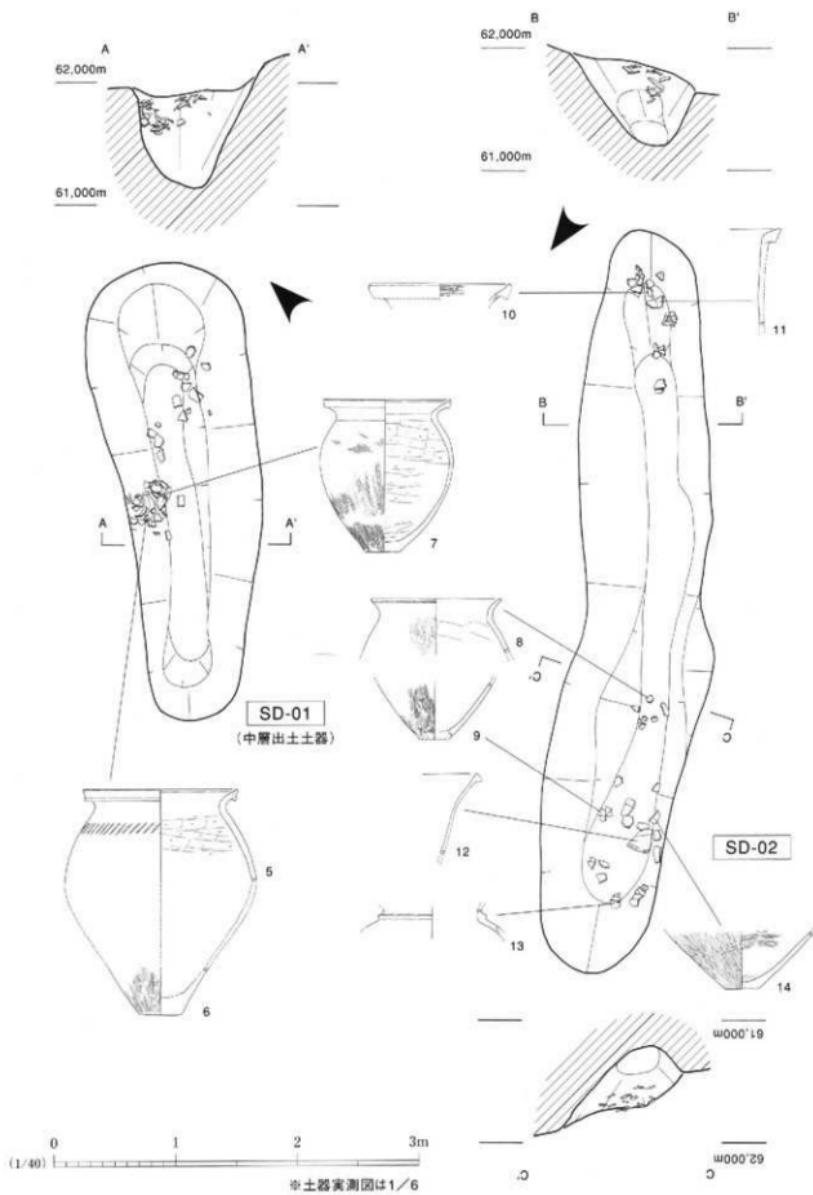
- 1.表土
(地山(1)・2 黄褐色質上シルト含みや砂質、炭含む、粘性中、しりび)
 - 2.黄褐色質上(炭含む、粘性中、しりび)
 - 3.黄褐色質上(炭含む、粘性中、しりび)
 - 4.黒褐色質上(炭含む、粘性中、しりび)
 - 5.黄褐色質上(シルト含みやや砂質、粘性中、しりび)
 - 6.暗褐色質上(シルト含みやや砂質、地山粘土・ロック含む、粘性中、しりび)
 - 7.黄褐色質上(炭含む、粘性中、しりび)
- (地山(1)) 明黄褐色質上+明黄褐色シルト
(地山(2)) 黄褐色質上+微褐褐色質上(粘土・ブロックを含む)
(地山(3)) 明黄褐色質上+黄褐色シルト
(地山(4)) 暗黄褐色質上+黄褐色質上
(1/80) 1:100000

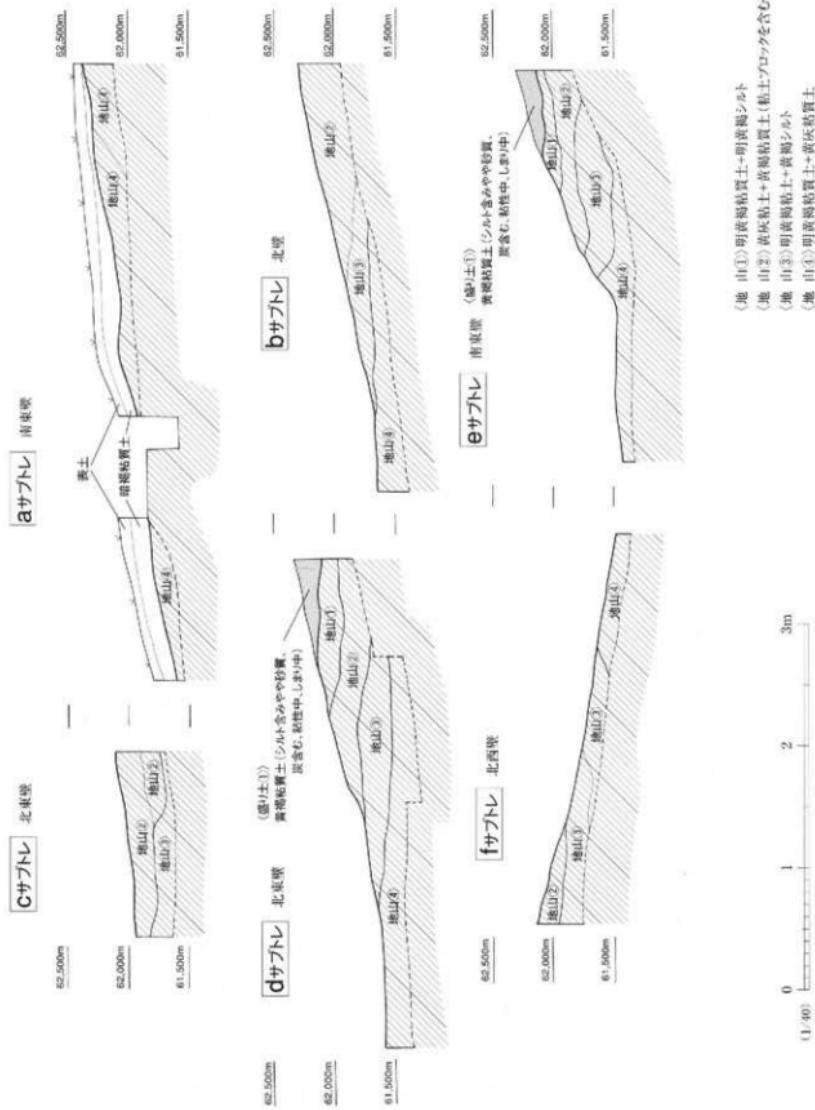


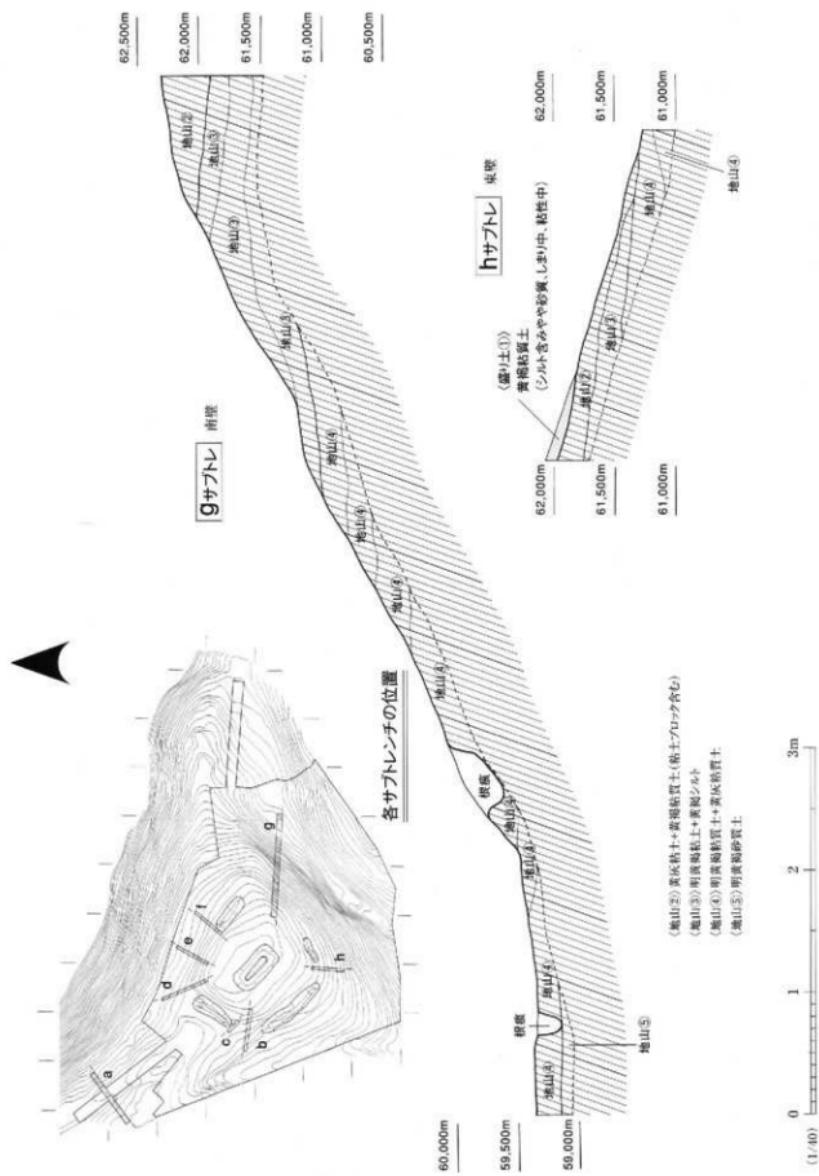
- 1.暗褐色粘質土(粘性弱、しまり弱、地山粘土ブロック・小石含む)
- 2.黄褐色粘質土(粘性強、しまり中、シルト・地山粘土ブロック含む)
- 3.茶褐色粘質土(やや砂質、粘性中、しまり中)
- 4.明黄色粘質土(粘性強、しまり強、地山粘土ブロック含む)

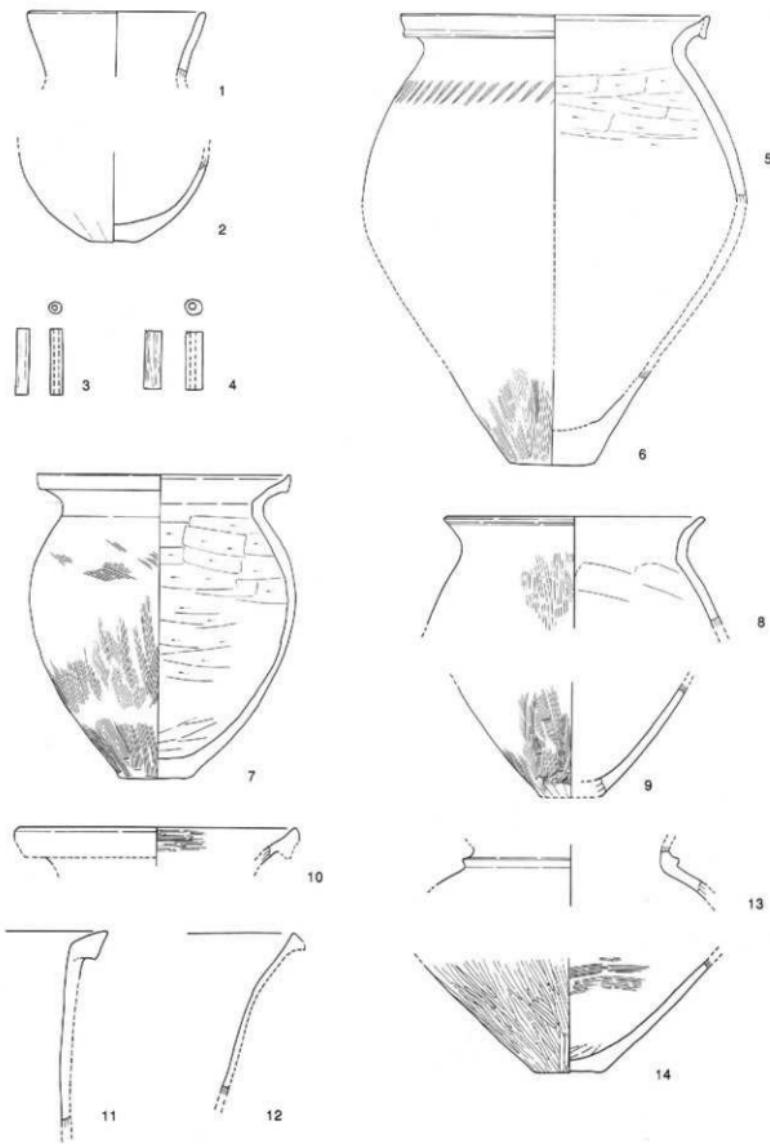
- 5.暗褐色粘質土(粘性強、しまり中、炭含む)
- (裏込) 6.黄褐色粘質土(粘性弱、しまり弱)
- (盛り土②) 7.茶褐色粘質土(粘性中、しまり中、シルト含みやや砂質、炭含む)

(1/30) 0 1 2m

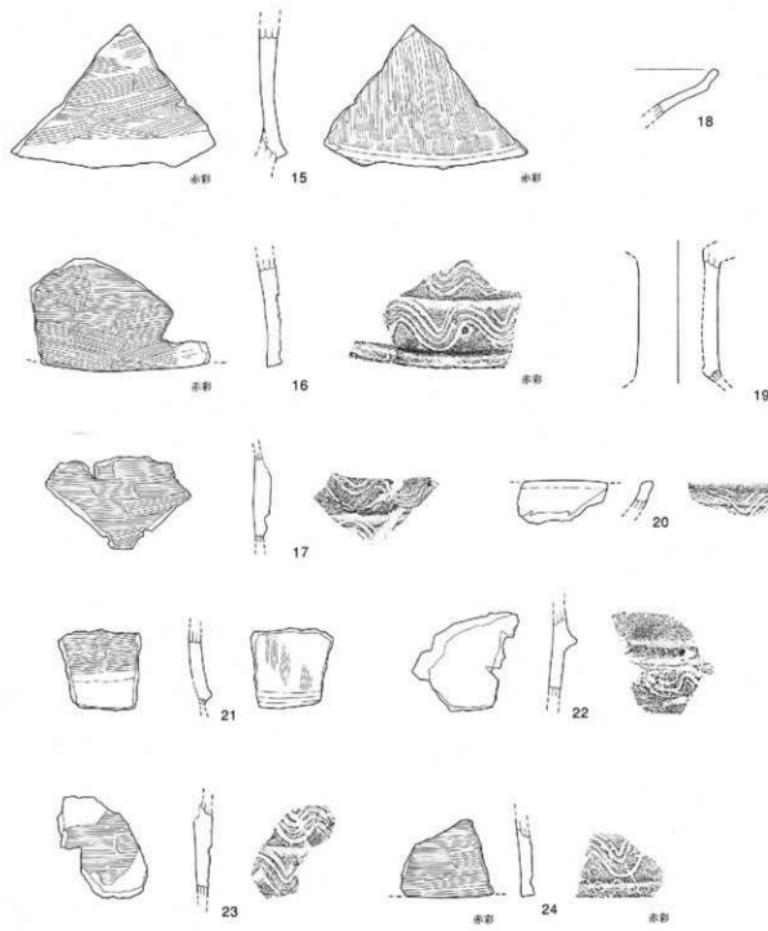








(1/3) 0 5 10 15cm



(1/3) 0 5 10 15cm



遺跡遠景（西から）



遺跡遠景（西から）



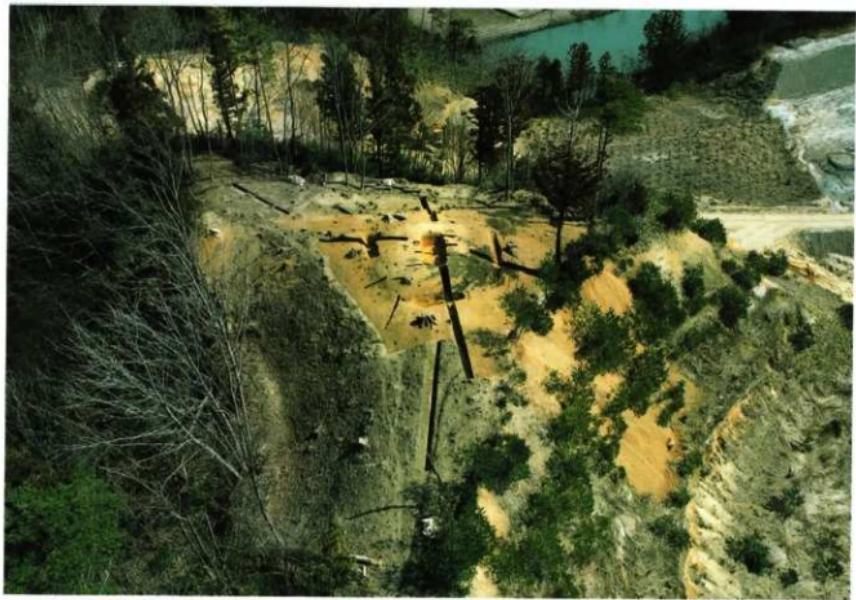
遺跡より南をのぞむ



遺跡より北をのぞむ



遺跡全景（確認調査後・上が南東）



遺跡全景（本発掘調査後・上が南東）



調査前（北西から）



周溝検出状況（北西から）



SD-01付近 墳丘土層断面①（北から）



SD-01付近 墳丘土層断面②（北から）



SD-01 土器出土状況（北から）



SD-01 墓（5~7）出土状況



SD-01 土層断面（北から）



SD-01 完掘状況（北から）



SD-02 土層断面（北西から）



SD-02 南東端 土器出土状況（西から）



SD-02 北西端 土器出土状況（西から）



SD-02 南東端 土器出土状況（北西から）



SD-02 完掘状況（北西から）



填丘南東部土層断面（東から）



SD-03 付近 填丘上面土器出土状況



SD-03 検出状況（東から）



SD-03 完掘状況（東から）



SD-04 土層断面及び土器出土状況（北西から）



SD-04 完掘状況（北西から）



SD-04付近 墳丘土層断面（北から）



墳丘南東部の急斜面（北東から）



調査作業風景①



調査作業風景②



墓坑検出状況（北西から）



墓坑内埋土土層縦断面①北西端上半（南西から）



墓坑調査過程（北西から）



墓坑内埋土土層縦断面②中央部上半（南西から）



墓坑完掘状況（北西から）



墓坑内埋土土層縦断面③南東端上半（南西から）



墓坑内埋土土層横断面①（北西から）



墓坑内埋土土層横断面②（北西から）



- 1 棺北東脇土器
出土状況
- 2 棺南西脇土器
出土状況
- 3 棺内管玉
出土状況
- 4 墓坑内盛り土
及び地山堆積
状況 (北から)
- 5 墓坑内盛り土
及び地山堆積
状況 (南から)



完掘状況（北西から）



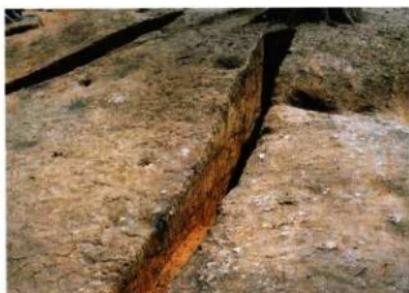
墳丘南西半盛り土除去後（南西から）



完掘状況（上が南東）



bサブトレ土層断面（南西から）



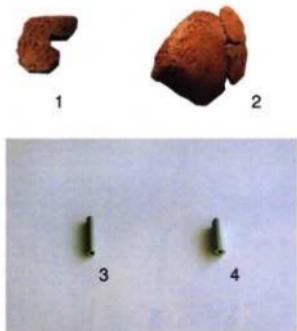
dサブトレ土層断面（北西から）



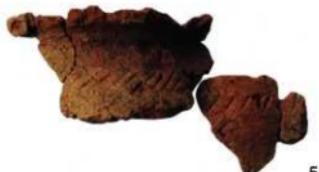
eサブトレ土層断面（北西から）



hサブトレ土層断面（南西から）



墓坑底面出土土器



5



7 上半

7 下半



8



10



11



12

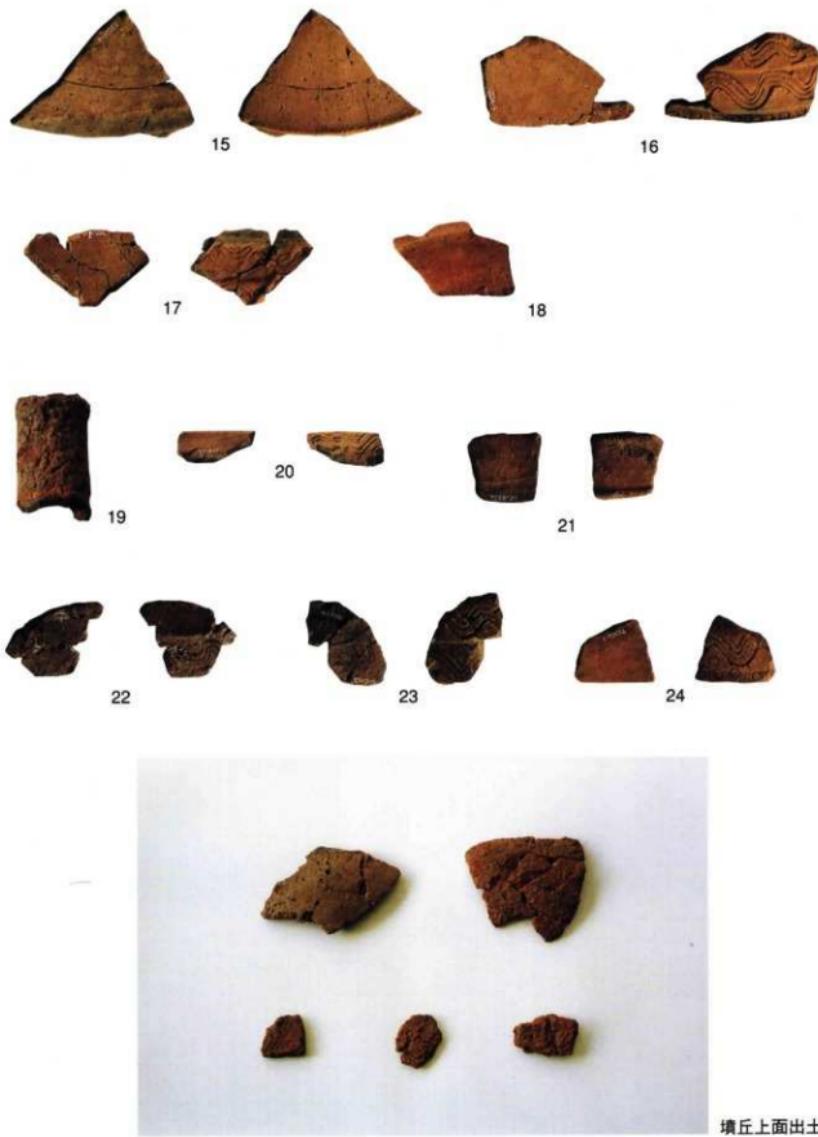


13



14

墓坑(1~4)・SD-01(5~7)・SD-02(8~14)出土遺物(番号は実測図番号に対応)



墳丘上面出土土器

報告書抄録

ふりがな	にいがたけんてらどまりまちやしきづかいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	新潟県寺泊町屋鋪塚遺跡発掘調査報告書							
編著者名	八重樫由美子							
発行機関	寺泊町教育委員会							
所在地	〒940-2502 新潟県三島郡寺泊町大字寺泊字磯町7411番地-14 TEL0258-75-5155							
発行年月日	2004(平成16)年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やしきづかいせき 屋鋪塚遺跡	新潟県三島郡寺泊町 大字人軒井字屋鋪 2963-1	15406	96	37度 35分 16秒	138度 48分 55秒	2002.10.17 ~12.18 2003.3.5 ~3.31	320m ²	土砂採取
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		備考		
屋鋪塚遺跡	墳墓	弥生時代後期	方形台状墓1基	弥生土器 緑色凝灰岩製菅玉				

新潟県寺泊町屋鋪塚遺跡発掘調査報告書

発行 2004(平成16)年3月31日

新潟県寺泊町教育委員会

〒940-2502

新潟県三島郡寺泊町大字寺泊字磯町7411番地-14

電話番号 0258-75-5155

印刷 三条印刷株式会社

〒955-0072

新潟県三条市元町9番3号

電話番号 0256-32-2281

